

「一つの大声で」

ヨハネの黙示録 7 : 9 - 17

January.11.2026

## ヨハネの黙示録 7 : 9 - 17 (パワポ)

### Preface

先週まで元旦礼拝・新年礼拝と 2 回に渡って、今年の主題聖句エゼキエル書 37 章と箴言 17 : 1、15 : 17 の御言葉について考えて参りました。

中でも、エゼキエル 37 章の御言葉で主なる神様は、「あなたの手の中で一つとなるようにせよ。わたしは、わたしの手の中で一つとする」と、不和のうちに分裂してしまった二つの国が再び一つになるように、私たち人類が、やがて再び一つにされることをお語り下さいました。

そして、そのお語り下さった内容の最終的な成就の姿、神の国の完成の姿が、今お読みしましたヨハネの黙示録の御言葉です。

神の国の完成は、私たち人間同士の、人と人との間における和解でもあり、平和の完成でもあります。

聖書の始めの「創世記」からヨハネの黙示録のすぐ前の「ユダの手紙」に至るまでは、この世界におけるいびつな平和、平和と宣われるものたちの不完全さと完全な平和への渴望、または人間同士の衝突を生々しい程に記録していますが、聖書の最後であるこのヨハネの黙示録には、完成された平和の姿が記録されています。

聖書の最後の最後であるヨハネの黙示録 21 章と 22 章には、光であられるイエス・キリストを中心にした新しい天と新しい地の姿が記されていますが、そこには、ちり程の悪も全く存在しません。

完全な平和を享受することの出来る場だけがあり、平和の君であられる主イエス様による平和の完成、和解の宣教の完成した姿があります。

先週見ましたエペソ書 1 : 10 の「天にあるもの地にあるもの一切のものが、キリストにあって一つに集められた」姿です。

新しい天と新しい地は、子羊イエスの御座を中心にして形造られており、父なる神と子羊イエス様の御座の前において仕えている人々がいます。

そして、その仕えている人々とは具体的にどんな人なのかを書き示して下さっているのが、先程読みましたヨハネの黙示録 7 章の内容です。

### Part One

まず第一に、その人々は、唯一まことの神を信じ、主イエス・キリストを信じる信仰者であったために大きな多くの患難を経てきた者たちであるということ

です。

子羊イエスの血潮で洗われ、永遠のいのちを与えられた者たちです。

イエス・キリストの弟子として生き抜いたがために神の御前に行くことが赦され、天の御国を受け継ぐ、神の国を相続する者となった者たちです。

そして何よりも、信仰によって義と認められ、主イエス・キリストの死によって神と和解させて頂いた、神との平和を持つ、神との平和の完成を喜び、味わっている人々です（ローマ書5：1－10）。

もうこれ以上、二度と、神様に対してがっかりするような思いになったり、期待していたことと違って心が満たされない恨めしい思いや残念な気持ちに捉われたりするようなことはありません。

神様に躓くこともなく、神様を信じて生きる、唯一まことの三位一体なる神を信じ歩むことを辞めようとする誘惑に陥ることもなく、「神というお方がいないかもしれない」なんていう疑いの心に包まれることもなく、父なる神、子羊なるイエス、聖霊なる三位一体の神様と永遠に続く完全な和解関係、平和に入れられた人々です。

それゆえに、彼らは、人間が有史以来ずっと苦しんで来た、苦しめられた、すべての人間同士の葛藤や争い、不和からも解放されています。

ヨハネの黙示録の著者使徒ヨハネは、9節にありますように、

### ヨハネの黙示録7：9（パワポ）

**すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち**

という、いがみ合いや、さばき合いや、衝突や、競争や、葛藤や争いなどの不和から解放された人々の姿を神が導かれた幻のうちに見ました。

父なる神と子羊イエスの御座を中心にして集まったその群衆の規模は、膨大です。

そして、この群衆の最も大きな特徴は、すべての国々からの数えきれないほどの大きな群衆であると同時に、多様な言語を使う人々によって構成されているということです。

## Part Two

元旦礼拝で、バベルの塔を建て上げた人類の話をしました。

神というお方に対する敵対心を表そうとバベルの塔を建て上げ、その高慢と暴虐と墮落ゆえに、話し言葉を、言語を混乱させられるという罰を受けた人類は、言葉が通じないから心が通じず、心が通じないから一緒に住むことが出来ず、再び言葉を通い合わせる代わりに、地の全面へと散って行きました。

言葉が互いに通じなくなってしまうために、結局、敵となり、仇となり、い

がみ合い、互いに譲らず対立し、争いが起こり、紛争が起こり、戦争を起こす、他に地獄がないような世界を作り上げて来てしまいました。

神の似姿に造られた尊い聖い存在という共通点の元、一つとなる、一体となるのではなく、言語、部族、文化、地域、国、背景という違いを強調しながら、数えきれないほど多くの葛藤を、衝突を、不和を生み出してきました。

しかし、その葛藤・衝突・不和は、イエス・キリストを中心にした天の御国にて、神の国にて、新しい天と新しい地にて終焉を迎えます。

もうこれ以上、言語、部族、文化、地域、国、背景などの「違い」をもって、争うことも戦うこともありません。

むしろ、それらの「違い」は、キリストにあって、神の懐の深さ、高さ、広さ、長さを賛美する豊かな多様性となります。

### ヨハネの黙示録 7 : 9 - 12 (パワポ)

イエス・キリストにあって葛藤・衝突・不和から解放された人々は、御座の前にひれ伏し、神を礼拝しながら、大声で子羊イエスをほめたたえています。

ただの大声ではありません。

「一つの大声で」です。

10節の、

### ヨハネの黙示録 7 : 10 (パワポ)

彼らは大声で叫んだ。

とあるこの「大声」とは、誰にも数えきれないほどの大勢の群衆の、誰にも数えきれないほどの多種多様な人々による、多種多様雑多な複数の声ではなく、「一つの大声」です。

日本語の印象からしますと、多くの人々による、多くのそれぞれの声で、それぞれが発した複数の大声のような感じがするかもしれませんが、ギリシャ語の言語を見ますと、この「大声」は、複数形ではなく単数形で書かれています。

つまり、「一つの大声」です。

英語の聖書では、これが良く表現されています。

英語の聖書には、こう書かれています。

### They cried out in **a** loud voice. (パワポ)

彼らは、「一つの」大きな声で叫んだ。

They cried out in loud voiceS という複数形ではなく、「in **a** loud voice」という単数形です。

多様な言語、多様な部族、多様な文化、多様な地域、多様な国、多様な背景と

いうてんでばらばら散り散りになっていたものが、キリストにあって一つに集められ、平和の絆で結ばれ、子羊イエスの血潮によって一致へと導かれ、混乱した心の通じ合わない言葉・声ではなく、「一つの声」で、互いに言葉が通じ、心が通じ合う人として、父なる神と御子子羊イエスをほめたたえています。

これこそが、人類の和解の完成した姿であり、平和の共同体である神の国です。そこには、二度と、葛藤が生じることはありません。

存在するのは、永遠に続く、神と人との和解と平和、人と人との和解と平和の姿だけです。

さらには、天にあるもの地にあるもの一切のものが、キリストにあって、一つに集められている神の再創造の御業の完成、人間を含めたすべての被造物が、今一度新たに、永遠に互いに支え合い、永遠に互いに尊重し合い、永遠に互いに循環し合う一体となっている姿がそこにはあります。

11節、12節。

### ヨハネの黙示録7：11－12（パワポ）

神によって造られたすべての被造物の秩序を保っている御使いたちと、被造物の象徴的存在である不思議な四つの生き物が、誰にも数えきれないほどの群衆と共に、神と子羊イエスの御前に出て行き、礼拝し、賛美を献げています。つまり、神と人、人と人のみならず、人と被造物、人と森羅万象、森羅万象同士の和解、平和が成就している姿も、ここにはあります。

イザヤ書11章と65章には、（私個人的にとっても好きな聖書箇所なのですが）神によって造られたすべてのものたちの究極的な平和、和睦に至らせて頂いた新しい天と新しい地、神の国の姿が描かれています。

### イザヤ書11：6－9（パワポ）

### イザヤ書65：17，24－25（パワポ）

これが元々本来あった、「初めに、神が天と地を創造した」という時の天地万物、森羅万象、神と人、人間同士、人と天地万物の完全な平和の秩序の姿でした。

しかし、これが、人の罪によって壊され、もがき、あがき、苦しみ、苦しめられている暴虐と墮落と高慢の世界が、今現存している、やがて朽ち果て滅びることが決まっているこの世界です。

そして、再び元の姿を、本来の姿を取り戻す、いや、主イエス・キリスト神なるお方のいのちが犠牲となっていますから、「それ以上の、レベルの違う平和の世界、新しい天と新しい地が再創造される神の時がある」と、聖書は約束しています。

その新しい天と新しい地に入ることが約束され、そこに入ることを我が相続とし、ゆずりとし、喜びとし、希望としながら、今与えられている置かれているその場で、キリストにある平和を体現するという宣教の御業に従事するよう神に導かれ、期待されている人々が、イエス・キリストを信じる私たちクリスチャンです。

### Part Three

使徒パウロ先生がローマ書 12 : 18 で、

**ローマ人への手紙 12 : 18 (パウロ)**

**自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。**

と仰いましたが、この御言葉を黙想していると、ダビデのことが思い出されました。

旧約聖書を読んでいますと、事あるごとに神様が、「ダビデゆえに、ダビデゆえに、ダビデゆえにわたしはあなたがたを我慢する、ダビデゆえにあなたがたを今は滅ぼさない。ダビデのようにあつて欲しい。わたしはダビデを愛している」というようなことをお語りになっていることを発見します。

また、新約聖書の最後、ヨハネの黙示録 22 : 16 では、イエス様ご自身がご自身のことを言い表される時、「わたしはダビデの根」と言われるほどに、聖書の最後の最後まで、ダビデという人についての神による言及があります。

では一体全体、なぜそこまで、神様に「ダビデ、ダビデ」と恋慕われるのかのように神の口に出されるのかということを考えてみました。

すると、ダビデという方は、正に使徒パウロ先生の言葉通りの「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい」という神の御言葉を生きようと努めた人だったのではないだろうかということが見えてきました。

他国と戦うことが人生そのものであるような戦国の時代・世にあつて、王として戦わなければならない、戦わずには生きられないような環境や状況に置かれている中でも、ダビデという方の生き方は、できる限り、可能な限り、戦わない選択をしようと努めているのが分かります。

戦う代わりに、「すべての人と平和を保ちなさい」という主の御心を表そうとする謙遜な人であったということが見えてきます。

自分のいのちを狙い続けて明らかに間違つた悪を行っているサウロ王に対してもそうでしたし、ダビデを王座から引きずり下ろし、再び荒野へと敗走させた息子アブサロムに対してもそうでした。

ダビデによって命救われ、ダビデの配慮と気遣いによって初めて社会におい

て人間扱いを受けるような、社会的立場を与えられ回復させてもらった仲間たちから、突然背を向けられ、命まで狙われるような裏切り行為にあっても、なおその人たちに対して怒る代わりに、そうまで人を変えてしまう程の状況に同情し、哀れみをかけ、配慮の言葉を投げかけながら、「私の罪を神様が罰しなさろうとしておられるのかもしれないから、彼らが私を呪おうとしても放っておきなさい。神の御旨がなることを私は願い、私はひたすらに平和を保つ者でありたい」というような姿を見せます。

ダビデという方は、神なるお方がどういうお方なのか、何を期待しておられるのか、来られるメシア・イエスキリストなるお方が平和の君であられることを良く知っており、その知っていることを生きようとされた方なんだと思います。それを、神は喜ばれたということなのでしょう。

#### Part Four

私個人の話でまた申し訳ないのですが、ここ最近になって、これまでとても良い関係を持たせて頂いた私の人生において決して忘れることの出来ない恩人とも言える方と、少し関係がギクシャクしてしまうようなことがありました。

はじめは私も意固地になって、「僕の方が正しい」という思いになっていましたが、祈り、御言葉を読み、また水曜礼拝でのメッセージを聞く中で、「まず僕自身の罪深さを、自分自身の貧しさを認めなければ」という思いを与えられました。

癩に障るので、その思いを跳ね除けて忘れてしまおうとしても、迫られるような思いが途切れることはありませんでした。

そして、神の御前に降参するような思いで、その方に、「ごめんなさい。私の能力の足りないせいです。力不足で申し訳ありません」という言葉をお伝えしました。

その後も、何度かやり取りをしていく中で、平安を与えられました。

イエス様が山上の垂訓で、「平和をつくる者は幸いです。その人たちは、神の子どもと呼ばれるからです」と仰いましたが、その御言葉の前に、「心の貧しい者は幸いです。天の御国は、その人たちのものだからです」とお語りになったことが、思い出されます。

「心の貧しい、つまり、神の前にあって誰よりも貧しく、誰よりも罪深く、誰よりも悪で、自分の正しさなんて主張の出来ない存在であることを認めることから、平和をつくるということが始まるのかな」と、「使徒パウロ先生も、『罪人の中の罪人。罪人のかしらです』と告白されながら、『分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保とう』と人生をかけて尽力なさったのだなあ」と気付きを与えられました。

#### Conclusion

イエス・キリストを信じる者たちには、完全な、完璧な平和が成就した神の国が約束されています。

神の国にて、永遠に平和のうちに生きることが約束されています。

それゆえに、尽きぬ平和、尽きぬ平安が、私たちにはあります。

ならば、そのために、平和をつくる者でありたいと願います。

平和をつくる者であるために、貧しい者であることを我先に認める信仰者でありたいと願います。

天の御国は、その人たちのものだからです。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書 12 : 18